

小児喘息をとりまく人たち

喘息の子どもを持つ親の目から

アレルギーを考える母の会 代表
園部まり子

● ガイドラインに基づいた治療を受ければ アレルギーはコントロールできる

～適切な吸入ステロイド薬の使用で、喘息発作のない毎日～

『アレルギーを考える母の会』を立ち上げたきっかけは、病院にいくら通っても悪化するばかりの息子のアレルギーが、アレルギー専門医のもとでガイドラインに即した治療を受けてぐんぐんと見違えるように良くなった経験をしたことです。

息子は、生後2ヵ月でアトピー性皮膚炎、7ヵ月で気管支喘息、4歳でアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎を発症し、8歳のときには40度の不明熱が2週間以上続いたり、失明の危機にもさらされました。治療を受けても悪化し続けるアレルギーで途方に暮れていたとき、喘息水泳教室に置いてあった「すこやかライフ」（現：環境再生保全機構発行）で、アレルギー専門医とガイドラインの存在を知りました。すぐさまアレルギー専門医のいる病院を受診したところ、息子は重篤なラテックスアレルギーと診断され、ガイドラインに基づく治療が開始されました。すると、これまで治療に難渋していたアレルギー症状は嘘のようにコントロールされ、高校生になった今、発作もなく、主治医から吸入ステロイド薬も「もうすぐ必要なくなる」と言われるほど、QOLの良好な日々を過ごしています。

この経験により、1999年に夜間救急外来で出会ったお母さんたちと、患者さんたちに「アレルギーには根拠に基づいた診断・治療のガイドラインがあること」を啓発し、専門医との橋渡しをして、「ガイドラインに基づく診療を受けるとアレルギーはコントロールできること」を実感してもらおうと、当会を立ち上げました。

● プライマリケア医にも患者にも ガイドラインのさらなる普及を

当会の最初の活動は、自分が住むマンションの集会所で、小児喘息指導医の勝呂宏先生（現：すぐろこどもクリニック院長）を招き、24名の母親を対象に勉強会を開いたことです。子どもたちは、その後、ガイドラインに基づく治療により、発作の回数が減り、運動会やマラソン

大会などにも参加できるようになりました。

以来、当会は、アレルギー診療の最前線にいる専門医、指導医の支援を受けながら、アレルギー相談室の開催（月1回）、講演会の主催（年2回）、会報誌「ちよっとCHAT」（写真）の発行（年4回）などの活動を展開してきました。しかし、7～8年たった今でも、年間360件ほどの相談のほとんどが、「ガイドラインに基づく治療を十分に受けておらず、症状のコントロールが得られていないこと」に起因するものです。つまり、ガイドラインが十分活用されていないというのが現実です。

そこで、当会は患者さんとそのご家族に、ガイドラインや医療機関の情報、受診の心構え（経過報告メモと質問メモを持って行くなど）、地域での講演会・勉強会の開催情報などをお知らせしています。ただ、アレルギー専門医の数は限られており、まして小児科医は不足しています。ですから、私たち、行政、関連学会の先生方などが力を合わせて、ガイドラインがすべてのプライマリケア医に普及・浸透するようにさらに働きかけていかなければならないと感じています。



写真 コピーフリーの会報誌「ちよっとCHAT」



アレルギーを考える母の会 かながわ県民センター15F相談室